

優秀賞

笑顔の種をまく

鹿児島県 鹿児島市立中郡小学校五年 湯川 さくら

「花育活動をしているお店で働いてみたい。」

私はこの夏、母のすすめで花屋の仕事体験に挑戦することにした。花は好きだけど、花の名前もほとんど知らない。でも、花屋も気になるし働いてみたい。しかも、その花屋は、花育活動をするために大学を休学したお兄さんが開いたお店だ。興味がわいた私は、さっそく「花育」について調べてみた。

「花育とは、より多くの子どもたちが花や緑に親しみ、育てる機会を通して、やさしさや美しさを感じる気持ちを育むこと」とあった。

いよいよ体験当日。優しいそうなお兄さんだけど話せるかな、私にとまると不安ばかりがふくらんだ。花屋の一日は、掃除や花の水やりから始まり、花の名前を教えてもらったり、フラワーアレンジメントを作ったりした。開店して間もなく、一人目のお客さんが来た。緊張して汗がどっと出てきた。

「いらっしやいませ。」

「家族の誕生日なの。花束をお願いします。」いきなり難題がとびかかってきた。好きな色やどの花を入れたいかなどを聞いて束ねてみる。仕上げはお兄さんに助けてもらいながら、やっと花束を渡した。

「ありがとう。午後も頑張ってね。」

とお客さんは笑顔で帰って行った。私の心にも、花が咲いたように晴れやかなすがすがしい気持ちになった。その後も、知り合いや先生、たくさんのお客さんが来てくれた。その人の要望に合うものを、色や長さ、方向を考えて心をこめて作った。みんな、一人前でもない私のお花を「ありがとう」と喜んで受け取ってくれた。心が温かくなり感謝の気持ちでいっぱいになった。さらに、

「初めての仕事なのに、アレンジのセンスがあるね。」

接客も上手。」

お兄さんにほめてもらって、心がおどった。

「もらった人が、笑顔になることがぼくの幸せなんだ。」

そう話すお兄さんの表情は、輝いていてまぶしかった。これまで私は、喜ぶのは花をもらう人だけだと思っていた。でも、そうか、お兄さんのように花を渡す側の喜びもあるのだ。誰かのための仕事や行いは、自分の幸せにつながっているんだ。誰かのために働くことができる自分になりたいと胸が熱くなった。

家に帰って、誕生日の近い父へ、私のアレンジした花を渡した。家族の中にも、笑顔の花が広がったみたいだった。夢中になった私は、次の日も花屋のお手伝いをさせてもらった。家では、切り花が長持ちする方法を試したり、たまごのからを鉢植えに再利用したり、花に触れ合う楽しみができた。今私の部屋には、あの日作った花が飾ってある。落ちこんだ気分の時も、花を眺めると元気になれる。これから私は、もっと花について勉強していこうと思う。いつの日かどこかで、その笑顔の花が咲くことを願って。

